J-28

わらび劇場を中心としたあきた芸術村の改修案（１）
賑わいの大広間
Bracken Akita Art Village renovation plan with a focus on theater (1)
Bustle of the saloon

○青木絵子[1]，金井亮祐[1]，重田秀之[2]，佐藤信治[3]
*Eko Aoki[1], Ryosuke Kanai[1], Hideyuki Shigeta[2], Shinji Sato[3]

Troupe Warabiza the Takarazuka Revue, which is one of Japan's leading theater group second only to the Shiki Theatre Company. Also bracken theater, home to the theater company Warabiza is located in Akita Prefecture Semboku, is located in the unusual rural as theater company. Currently bracken theater has become one of the autumn artistic village of facilities, aging is in progress has passed more than 40 years from completion. Also by harmful rumors since the Great East Japan Earthquake as a whole bracken theater, has Tonoi is foot traffic, even 5 years after the current from the earthquake, Art Village overall restructuring that autumn also in order to bring back the audience there is a need. So we make a proposal for the new theater that becomes the epicenter of the bustle in the autumn of art village.

1.　はじめに

劇団わらび座は宝塚歌劇団,劇団四季に次ぐ国内有数の演劇集団である．劇団わらび座の本拠地であるわらび劇場は秋田県仙北市に位置しており,劇団としては珍しく地方に位置している．現在わらび劇場はあきた芸術村の施設の一つとなっているが,竣工から 40 年以上が経過しており老朽化が進行している．またわらび劇場全体としても東日本大震災以降の風評被害により．震災から 5 年経った現在でも客足が遠のいており,お客さんを呼び戻すためにもあきた芸術村全体の再編が必要とされている．そこで私たちはあきた芸術村における賑わいの発信地となる新劇場の提案を行う。

2.　計画背景

劇団わらび座は,戦後の復興に向かう 1951 年に東京で誕生した. その後,新しい日本の歌と踊りの創造をめざし、1974 年に全国 800 万人の市民による支援を受け多種様々な民謡の残る,秋田県田沢湖町（現仙北市）にわらび劇場が誕生した．わらび劇場から始まったあきた芸術村は,徐々に施設を拡大し,今では温泉宿ゆぽぽや田沢湖ビール工場,レストラン,農園など多様な施設を備えた一大リゾートとなった. しかし,それら施設の配置には,問題があり,劇場と他施設が分断されたような関係にある．(Figure.1)

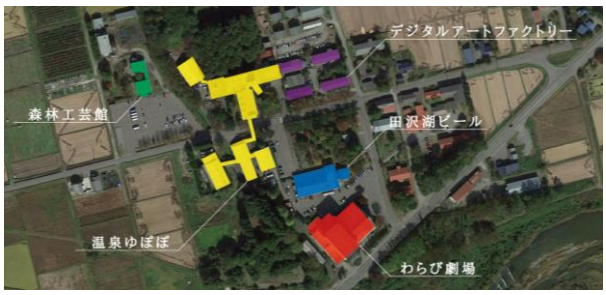

Figure.1 Positional relationship between the facility

わらび劇場は年間 50 万人の観客を動員しているが,その人々の多くは,公演を見たあとそのまま帰宅してしまい,劇場の賑わいに対し,他施設の寂しさが目立つ.

3.　建築計画

わらび劇場建て替えに伴い,計画地を現在の場所から別の場所に移転する．移転することで現在分裂している賑わいの再編集を行い,また建て替えている期間もわらび座を使用することができる．人々の動線や,賑わいをもとに計画地を設定する.

(Figure.2)

Figure.2 Planning area

１：日大理工・学部・海建　Department of Oceanic Architecture & engineering, CST. , Nihon-U.
２：日大理工・院(前)・海建　Department of Oceanic Architecture & engineering, CST. , Nihon-U.
３：日大理工・教員・海建　Department of Oceanic Architecture & engineering, CST. , Nihon-U.

緑地内にある道の延長線上で,人々の動線が絡まる場所は,今回の計画では「大広間」と呼ぶ,広場のような空間がある.

また,客席の出入り口は,主に大広間に近い場所（図中の薄橙色で示す空間）になっており．劇場やその他の施設へ出入りするための動線を,大広間に集約することで,人々の動き,賑やかさ,多様性を生み出している．(Figure.3)

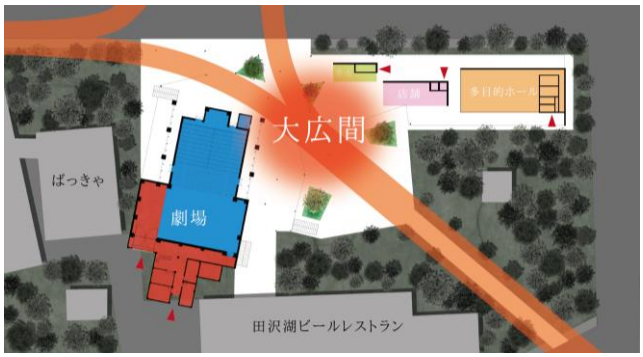

Figure.3 Plan view

大屋根は,秋田芸術村における新しい空間を提供しつつも,日本家屋に見られる縁側や軒下のような空間を作りだし,劇場やショップなどに囲まれた交流の核となる半屋外の大広間となる．起伏の激しい屋根は,夏は日差しを防ぎ,過ごしやすい空間を作り出している．(Figure.4)

Figure.4 Summer saloon

冬は風による熱の損失を現象させることで,自然と空調の調整という機能を果たしている．また,秋田の激しい降雪も物理的に防ぎ,夏,冬ともに季節を感じられる

憩いの場となる．(Figure.5)

Figure.5 Winter saloon

多くの劇場に見られる西洋式の客席を参考にしながらも,わらび座が強みとする民俗芸能を意識し,舞台と座席が近くなるよう計画した．公演の前後や休憩中など,ホールが明るい時には,あたたかみが感じられる室内となっている.

さらに,舞台と一階の座席は可動式になっており,公演が休みの日にはワークショップや発表会など多種多様なイベントに合わせた使い方ができる．(Figure.6)

参考文献　http://www.warabi.or.jp/about/

Figure.6 Theater introspection

Figure.7 Appearance

Figure.8 Sectional view